

2021 年度 大谷大学公開講演会

## サン=テグジュペリと砂漠での出会い

国際学部 国際文化学科 藤田 義孝

### はじめに

『星の王子さま』の作者として有名なサン=テグジュペリにとって、人間の本質的な出会いの舞台は常に砂漠であった。なぜ、彼にとっては砂漠がそのように特権的な出会いの場となったのだろうか。また、飛行士だったサン=テグジュペリは、実際に砂漠でどのような出会いを経験したのだろうか。彼の著作から、主に『人間の大地』と『星の王子さま』を取り上げながら、彼が考えた人間の「出会い」の意味を考察してみたい。

### 1. サン=テグジュペリという作家

アントワーヌ・ド・サン=テグジュペリ (Antoine de Saint-Exupéry, 1900~1944) 略年表

- 1900 年 フランス貴族の子としてリヨンに生まれる。
- 1904 年 父が亡くなり、親族のもとに身を寄せる。
- 1912 年 帰省先近くの飛行場で初めて飛行機に乗せてもらう。
- 1917 年 バカロレア (大学入学資格試験) 合格、弟フランソワ病死。
- 1920 年 海軍兵学校の受験に失敗。
- 1921 年 兵役につき、空軍で民間パイロットのライセンス取得。
- 1923 年 瓦・タイル製造販売会社に就職。婚約したが破綻。
- 1924 年 トラック販売会社に転職 (1年半で退社)。
- 1926 年 ラテコエール航空会社で郵便飛行事業に従事。
- 1929 年 『南方郵便機』出版。アルゼンチンで郵便飛行事業に従事。
- 1931 年 『夜間飛行』出版、フェミナ賞受賞。コンスエロと結婚。
- 1934 年 エール・フランス社に入社。
- 1935 年 パリ・サイゴン (ホーチミン) 間の長距離飛行記録に挑戦し遭難。
- 1936 年 新聞のルポを引き受け、スペイン内戦を取材。
- 1938 年 ニューヨークから南米への長距離飛行挑戦中、事故に遭い重傷。
- 1939 年 『人間の大地』出版、アカデミー・フランセーズ小説大賞受賞。英語版『風と砂と星と』がアメリカでベストセラーとなる。
- 1940 年 33-2 飛行部隊に所属し、偵察飛行任務に従事。動員解除後、渡米。
- 1942 年 『戦う操縦士』の仏語版と英語版、ニューヨークで出版。ベストセラーに。
- 1943 年 『星の王子さま』の仏語版と英語版、出版。アメリカを離れ、北アフリカのアルジェで 33-2 飛行部隊に復帰。
- 1944 年 出撃限度回数を超えて何度も偵察に飛び立ち、7月31日の任務から未帰還(戦死)。

## 2. 砂漠での出会い

### (1) 風と砂と星の下で

その夜、僕らの村の大広場、つまり、木箱からの揺らめく光に照らされた砂漠の片隅に集まって、僕らは待っていた。僕らを救うはずの夜明けか、あるいは僕らを襲うムーア人たちを。いったいどうして、そんな夜がクリスマスの趣きを持っていたのか。僕らは思い出を語り合い、冗談を言い、歌を歌った。

僕らは、すっかり準備の整ったパーティーに参加するときと同じ、あの心が浮き立つ気分を味わっていた。とはいえ僕らのパーティーはこの上なく貧しかった。あるのはただ、風と砂と星だけだった。さしずめトラピスト会修道士風の質素なパーティーだ。だが、薄暗い光のテーブルクロスの上で、自分の思い出以外に何も持たない6、7人の男は、目に見えない富を分かち合っていた。

僕らはようやく出会ったのだ。人はふつう、ずっと同じ道を並んで歩いていても、それぞれの沈黙に閉じこもったり、あるいは内容のない言葉を交わすことしかしない。だが、いずれ危機にさらされるときがくる。そのとき、人は互いに肩を組む。自分たちが同じ共同体に属していることに気がつく。他人の内面を発見することで自己を大きく解き放ち、満面の微笑みで見つめ合う。まるで牢獄から釈放されたばかりの囚人が海の広大さに目を見張るように。(『人間の大地』、第2章1節)

- 共通の危機を前に力を合わせることで、心と心が結ばれること

### (2) ベドウィンとの出会い

奇跡だ……。彼が僕らに向かって砂の上を歩いてくる。神が海の上を歩くように……。

そのアラブ人はただ僕らを見つめ、手で僕らの肩を押した。僕らはおとなしく地面に横たわった。ここにはもう人種も、言語の違いも、対立もない……。ただ、このみすぼらしい遊牧民がいて、僕らの肩に大天使の手を置いたのだ。

(中略)

そして僕らを救った君、リビアのベドウィンよ、君は僕の記憶から永遠に消え去るだろう。僕が君の顔を思い出すことは決してないだろう。君は人間そのものであり、一度にあらゆる人間の顔をして僕の前に現れるからだ。君は一度も僕らをしげしげと見つめたりしなかったが、僕らが誰だか見抜いていた。君は愛すべき兄弟だ。僕はすべての人間のうちに君を認めるだろう。

僕にとって君は、気高さと寛容さに溢れ、水を授ける力を持った君主だ。僕のすべての友とすべての敵は、君を通して僕のほうに歩いてくる。だから、僕にはもうこの世にただの一人も敵はいないのだ。(『人間の大地』、第7章7節)

- 命を救われる奇跡的な邂逅であり、普遍的な人間愛の根拠となる出会い

### (3)砂漠の呼び声

#### ①王子との出会い

最初の夜、人が住むところから千マイルも離れた砂の上で、僕は眠りにつきました。大海原の真ん中を救命ボートで漂流する遭難者よりももっと孤独でした。だからそのとき、僕がどんなに驚いたか分かるでしょう。明け方に、不思議な小さな声に僕は起こされたのです。それはこんな声でした。

「すみません……ぼくにヒツジの絵をかいて！」

「えっ！」

「ぼくにヒツジの絵をかいて……」(『星の王子さま』、第2章)

#### ②声としての存在

ここでは、まず初めに声がある。[...] これが出会いである。それはすでに存在していた少年を語り手の「僕」が発見するのではない。この声こそが、少年を創造するのだ。(三野博司『『星の王子さま』の謎』論創社、2005年、pp.25-26)

#### ③弟フランソワの死

リヨンのお医者様が懸命に治療を続けてくださった甲斐もなく、フランソワはますます衰弱していった。そして、地中海沿いのサン＝ラファエルで入院治療を受けた後、サン＝モリスへ移されて、とうとう1917年7月10日、フランソワは静かに息を引き取った。長く続いた発熱で弱り切っていたフランソワの心臓は、この時、苦しみから解放された。(中略)

弟の死は、アントワヌにどれほど大きな影響を与えたことだろう。なにしろ子どもの頃の一番の友であり、遊び仲間を失ったのだ。ふたりはいつも一緒だったし、通った学校もすべて同じだった。(シモーヌ・ド・サン＝テグジュペリ、谷合裕香子訳『庭園の五人の子どもたち』吉田書店、2012年、pp.225-226)

#### ④生きている死者の呼び声

足もとの砂が、さらさら音をたてて流れていきます。私の頭髮にあたった風が、さっさ、ささーっと鳴り、着衣のボタン・ホールにあたった風が、心細い笛のように鳴りました。

空気がひどく乾燥している分だけ、音の共鳴する度合も高いのか、メガネのフレームにあたった風は、弦のように鳴りました。

不思議な異界の言語のように、私はその音を聞いていました。静まり返った砂漠は、異界の音に満ち満ちていると思い、とりとめないことを、とりとめもなく思いめぐらしながら、ぼんやり砂漠の風に吹かれていました。

その時です。出し抜けに私の名を呼ぶ声を聞いたのです。そんなに遠い距離ではない。驚

いて振り向きました。人影らしいものはどこにもない。私はすぐ、これは錯覚だと思い、また歩きはじめたとき、もういちど背後から私の名を呼ぶ声を聞いたのです。風の音ではなく、女性の声でした。その声は、もういちどはっきり聞こえて風の中に消えていきました。

私は、ぎょっとして立ちどまり、そしてそれが、私の遠い日の記憶の底にある母の声だと思った瞬間、説明しようのない大きな感情の塊が、どーんと私を直撃したのです。私は凝固したまま、動くことができない。不安定な奇妙な感覚でした。懐かしさと寄り辺なさの入り混じった感情でした。私はいま、死者たちの中にいる、と思いました。(山形孝夫『黒い海の記憶』岩波書店、2013年、pp.10-11)

- 自分の中に生きている死者の呼び声を聞くこと

### 3. 砂漠と人間

①出会いの舞台となる「砂漠」＝無機的な鉱物の世界←→儂い奇跡的存在としての生命

②奇跡として存在する「私」の意識

だが、何より驚くべきことは、この惑星の丸い背の上に、隕石を引き寄せる純白のシートと星空の間に立つ人間の意識が存在したことだ。そして、その意識に、まるで鏡のように火の驟雨が映し出されていたことだ。鉱物質の土台の上でなされる夢想は、一つの奇跡である。(『人間の大地』、第4章4節)

③関係の結び目としての人間

肉体が減ぶとき、本質が現れる。人間は関係の結び目に他ならない。関係だけが人間にとって重要なのだ。(『戦う操縦士』、第21章)

#### おわりに

「出会う」とは：

- 1) 共通の危機を前に力を合わせることで、心と心が結ばれる(仲間同士の連帯)
- 2) 普遍的な人間愛の根拠となる奇跡的な邂逅(敵味方を超えるヒューマニズム)
- 3) 「生きている死者」の呼び声を聞く(生者/死者を超えた神秘的な出会い)

#### 参考文献

- サン=テグジュペリ、渋谷豊訳『人間の大地』(1939)光文社古典新訳文庫、2015年  
サン=テグジュペリ、稲垣直樹訳『星の王子さま』(1943)平凡社ライブラリー、2006年  
シモーヌ・ド・サン=テグジュペリ、谷合裕香子訳『庭園の五人の子どもたち』吉田書店、2012年  
三野博司『『星の王子さま』の謎』論創社、2005年  
山形孝夫『黒い海の記憶』岩波書店、2013年